今月の用語

隣に伝えたい新たな言葉と概念

【レビー小体型認知症】

英 dementia with Lewy bodies

略 DLB

類 レビー小体病を伴う認知症 Major Neurocognitive disorder with Lewy Bodies（DSM−５），レビー小体病 Lewy body disease：LBD，認知症を伴うパーキンソン病　Parkinson's disease with dementia：PDD

【用語の解説】

レビー小体型認知症（DLB）は比較的新しい疾患概念である．もとは小坂らの1976年以降の一連の研究報告が基礎となり，1995年の国際ワークショップ以降は現病名で総称されるようになった．

本疾患は，病理学的には中枢神経系における多数のレビー小体の出現とそれに基づく神経細胞脱落によって特徴付けられる．レビー小体とは，元来はパーキンソン病（PD）の病理像として知られていた封入体の一種であり，神経細胞障害を引き起こすとされる．

臨床的には，一般的な認知症の基準を満たし，他の疾患や物質作用で説明できないことを前提として，次の３徴が中核的特徴であるとされている．①注意や覚醒レベルの変動を伴う動揺性の認知機能，②具体的で詳細な繰り返し出現する幻視，③誘因のないパーキンソニズム．

近年，本疾患名が一般にも知られるようになってきているが，解釈や診断基準には留意点が残っている．例えば「認知症」の名を冠してはいるが，診断基準上の「顕著で持続的な記憶障害は病初期には必ずしも起こらない場合がある」や「覚醒レベルの変動を伴う」という，一般的な認知症の概念とは合致しない文言をいかに取り扱うべきかという問題がある．これに関しては小坂自身が「そもそもレビー小体型認知症という名前がよくない」と述べており，他方面からも DLB,PD ほかレビー小体の存在を特徴とするすべての病態を包括する疾患概念として，レビー小体病（LBD）という呼称を用いるべきであるという意見が多い．

いずれにせよ，未だ診断には慎重さが求められる，曖昧さを孕む疾患概念である．

【その他必要事項（本用語とつながりの深い専門分野，関連学会など）】

（参考文献）

認知症テキストブック, p264−289，中外医学社，2008
認知症疾患治療ガイドライン2010コンパクト版2012，p170−174，医学書院，2012
DSM−５精神疾患の診断・統計マニュアル，p594−602，p609−612，医学書院，2014
精神医学2010Vol. 52No. ５，P515−519，医学書院，2010

（関連学会）

日本認知症学会，日本神経学会，レビー小体型認知症研究会

（国立国際医療研究センター　国府台病院　精神科　佐藤護）

本誌133p に記載